

博物館と情報

中山和彦

筑波大学 学術情報処理センター
国立民族学博物館 情報システム運営委員会

博物館は、「物」としての標本資料の収集、展示だけを目的とするのではなく、現代の博物館は、標本資料のほかに、映像資料、音響資料、文字資料など、さまざまな情報資料を収集し保管するのが使命である。そのため、博物館の「物」という文字は誤解をまねきやすいので、博情報館、あるいは博情館との名称にしたほうがよいという意見がある。その考えにもとづき、それらの役割をはたすことのできる能力をもった大きなコンピュータを設置し、情報システムを完備する必要があるという構想を、一步一步実現している博物館がある。梅棹忠夫氏の考え方たと、同氏を館長とする国立民族学博物館である。

本稿において、博物館と情報とのかかわりについて考察するための資料として、国立民族学博物館における情報処理システムとその背後にある考え方たを紹介する。また、これから目指している博物館における情報のありかたと、考慮を必要とする点について論及をおこなう。

博情館をささえる

ホロテーク・システム

博物館は、その起源からして、珍しいものを収集しておき、それを人々に見せることを目的としていた。そこで役割は、ものの保管、研究、ものを通しての啓蒙、教育であった。

そのようなこれまでの博物館に対する考え方た、ありかたに対して、博物館をものの収集、展示という役割から脱却させ、資料館、情報センターとしての役割をもつものとして位置づけている博物館がある。国立民族学博物館がそれである。

「国立民族学博物館 コンピュータシステム」には、同館の概要を、次のように紹介している。

「国立民族学博物館は、研究所と博物館の機能をもつ、いわば『研究博物館』ともよべるユニークな機関として昭和49年6月に設置されました。

この博物館は、民族学を研究する人びとが利用する大学共同利用機関になっており、日本における民族学研究の中心的

役割を担っています。………

その研究をおこなうために、世界各地でフィールドワーク（実地調査）をおこない、さまざまな民族資料や情報を大量に収集しています。この博物館は、世界の諸民族の社会と文化に関する総合資料館であり、情報センターとしての役割をもつことになります。」

このような博物館が存在しているのは、同館の発案者であり、創設者として現在まで同館の思想的、かつ活動の中心となっている梅棹忠夫館長の考え方にもとづくものである。同館長は、博物館のありかたについて、創設10周年記念式典の講演「博物館は未来をめざす」の中で、次のように述べている。^{*1}

「博物館は、通例はもの、すなわち実物あるいは標本類をあつめるところと理解されております。しかし、博物館があつめるものは、ものだけではありません。ものにまつわる、あるいはものに直接関係のない、さまざまな情報こそは、博物館のもっとも重要な収集の対象であります。その意味では、博物館の「物」とい

う字は誤解をまねきやすいので、むしろ、博情報館、あるいはちぢめて博情館といったほうがいいのではないかという意見もあるくらいであります。

博物館は情報機関であります。それぞれの分野に応じて、ひろく情報を収集し、蓄積し、変換し、創造し、伝達する。そういう機関であります。そして、集積された膨大な情報のなかから、最新の、正確な知識を市民に提供する、これが博物館の仕事であります。その知識は、人間の過去、あるいは現在に関するものであるかもしれません。しかし、そもそもなんのために知識・情報を提供するのかといえば、市民に、未来の人間生活を構築するために、あやまりのない世界像を形勢する材料を提供することだ、といってよろしいかとおもいます。」

この講演では、「意見もあるくらいであります。」と、あたかも他人の誰かがいっているような表現がされている。しかし、この意見は梅棹忠夫自身のものであり、また、永い間の信念ででもあった。

筆者は、同館が創立される前年（1973）に設置された創設準備室の段階から、梅棹館長の情報に対する考え方を具現化するための手伝いをしてきた。梅棹館長から、博情報館、博情館という言葉を聞いたのは、国立民族学博物館が開館してしばらくしたことと記憶している。しかし、そのような言葉であらわされなくとも、博物館にとって本質的に重要なものは「もの」ではなく、情報であるとの考えは民族学博物館の計画段階から明確に表明されていた。そして、標本資料のほかに、映像資料、音響資料、文字資料など、さまざまな情報資料を収集し保管するのが博物館の任務だということを強調していた。それらの大量の情報を蓄積したり、

そのなかから必要なものを検索したりするためには、大きなコンピュータが必要であると文部省に予算の要求をされた。また、コンピュータを民族学研究に活用するためには、情報処理に関する専門研究者をもつ研究部門が必要だということから、「コンピュータ民族学」という研究部門の設置が計画され、実現している。

『民族学博物館に、何か新しい構想にまとづく動きのある展示物を。』という梅棹準備室長の要請に応じて提案したのが、その当時の日本の最先端技術である電子技術とロボット工学を用いたビデオテークである。このビデオテークという名称は、民族学博物館が開館された時に、梅棹館長によって命名されたものである。その名称は、新しい展示システムの構想をつくり、その具体化のために協力、努力をしてきた電子計算機運営委員会のメンバー一同をびっくりさせた。それまでは、「電子紙芝居」という通称で予算要求もし、その名称を聞いた人びとは何となくどんなものができるかが判ったような気がしていた。それが、突如、何だか訳のわからない名称としてお披露目されたからである。

梅棹館長の説明によると、『図書館のことをビブリオティークといっている。ティークというのはギリシャ語のτεκεに語源をもち、収納棚という意味をもっている。図書館はビブリオン（書物）を収容する棚という意味から、ビブリオティークといわれるようになった。それにならって、ビデオを収容しておく棚という意味でビデオティークと命名した。』とのことであった。

このビデオティーク・システムは、単にビデオを収容しておく棚であるだけがない。ビデオティーク・システムの機能は、

利用者が自分の見たい内容のビデオを選び、キー操作して、みたいビデオの番号を端末から中央制御システムに伝え、選びだされたビデオをロボットが棚からとりだし、搬送をし、ビデオプレーヤーにかけて、画像情報を再生し、希望者の見ているテレビへ送出する。中央制御システムはコンピュータそのものであり、観客は意識していないくとも、コンピュータを用いて情報検索をしているのである。情報検索をして自分の必要とする情報を選びだし、それを利用しているのである。

図書館の図書文献資料のデータベース化とコンピュータによる検索は、民族学博物館創設計画のときから重要課題であった。その目的に適したコンピュータが導入され、コンピュータでの漢字処理が可能になるとカード目録は廃止され、電子目録としてコンピュータファイルに記録されるようになった。コンピュータを利用した情報活用のためのビブリオテーク・システムの稼働開始である。

ここに、情報蓄積、有効利用のために、コンピュータを中心とした2つのティーク・システムが稼働を開始した。このようなコンピュータを利用して実現したティーク・システムを、他の情報資料にも拡大しようという考えがでてくるのは当然である。それを音響の分野にまで拡張して、音響情報を蓄積しておき、コンピュータを用いて検索をおこない、必要な音響情報を隨時、瞬時にとりだして使用することのできるためのフォノティークがある。このシステムの原形は、民族学博物館創設時にすでに構想、実現され、ビデオティークの拡張システムのような形で一般に公開されている。その他に、構想がつくられ、すでに実施段階に移っている、写真情報を蓄積し、コンピュータで検索

をし、提示するフォトティークがある。

その他、標本資料についても画像情報、文字情報がつくられ、データベース化がおこなわれている。そのために、館員の協力による情報作成の他に、自動的に情報を作成し、蓄積するための装置（標本資料自動計測装置、画像入力装置等）や諸システムが開発されている。

このようにしてつくられた、いろいろな情報の利用について、梅棹館長は、次のように記している。^{*2}

「ここにいま、ひとつの装置をもったブースがある。わたしはブースの座席にすわり、情報よびだしのためのキーボードにむかう。この装置にはビデオティークだけでなく、ビブリオティークも、フォノティークも、フォトティークもすべて接続されている。収蔵庫の標本資料も、文字情報としても映像情報としてもたちどころにとりだすことができる。各種の情報は必要に応じて自在にとりだせるのである。このような装置をわたしはホロティークとよびたい。ホロはギリシャ語のホロン、すべてという意味の語である。このようなシステムをホロティーク・システムとよびたいのである。」

ここに、トータルシステムとしての国立民族学博物館の情報システム構想が明確にされている。一緒にシステム作りをしてきたものとしては、この構想は当初から明確な形であったものとは思えない。コンピュータのハードウェア、ソフトウェアの進歩にともなって、それらを利用したらどのようなものができるか。できたものを利用したら、どのようなことができるか。という検討から作りあげられてきた、情報処理に関する諸装置、諸システムが国立民族学博物館にある。また、このようなことをやりたいのだが、

どうしたらできるか。という館、研究者からの要請により開発した情報処理に関する諸装置、諸システムがある。

それらの諸装置、諸システムによって作りだされ、蓄積され、利用に供されているいろいろな大量な情報がある。それらの情報をばらばらに取扱い、ばらばらに利用するのではなく、一つの統合した情報として利用できるようにした装置、それがホロテークという名称でよばれる装置である。その装置の利用を可能にするシステム、それがホロテーク・システムである。このホロテーク・システム構想によって、これまでに作りあげられてきた諸情報システムだけでなく、これから国立民族学博物館に設置されるであろう情報システムをも含めて、統合したシステムがきちんと位置づけられるのである。それによって、博物館から博情館へと脱皮することが可能になるのである。

民族学博物館における 情報処理システム

ホロテーク・システムは、その完成をめざして整備がおこなわれつつある概念的なシステムである。これから整備をしていかなければならないことが多い。国立民族学博物館では、年次計画的に情報処理システムの整備を図っている。次頁に、「情報処理システム整備計画概念図」として示したもののがそれである。また、現状のコンピュータシステムを「コンピュータシステム構成図」に示した。

年次的に進められてきた整備計画はつきのごとくである。

第一期整備計画（1978～1982） 文字情報システムを中心とした整備がおこなわれた。文献図書資料データベース、H

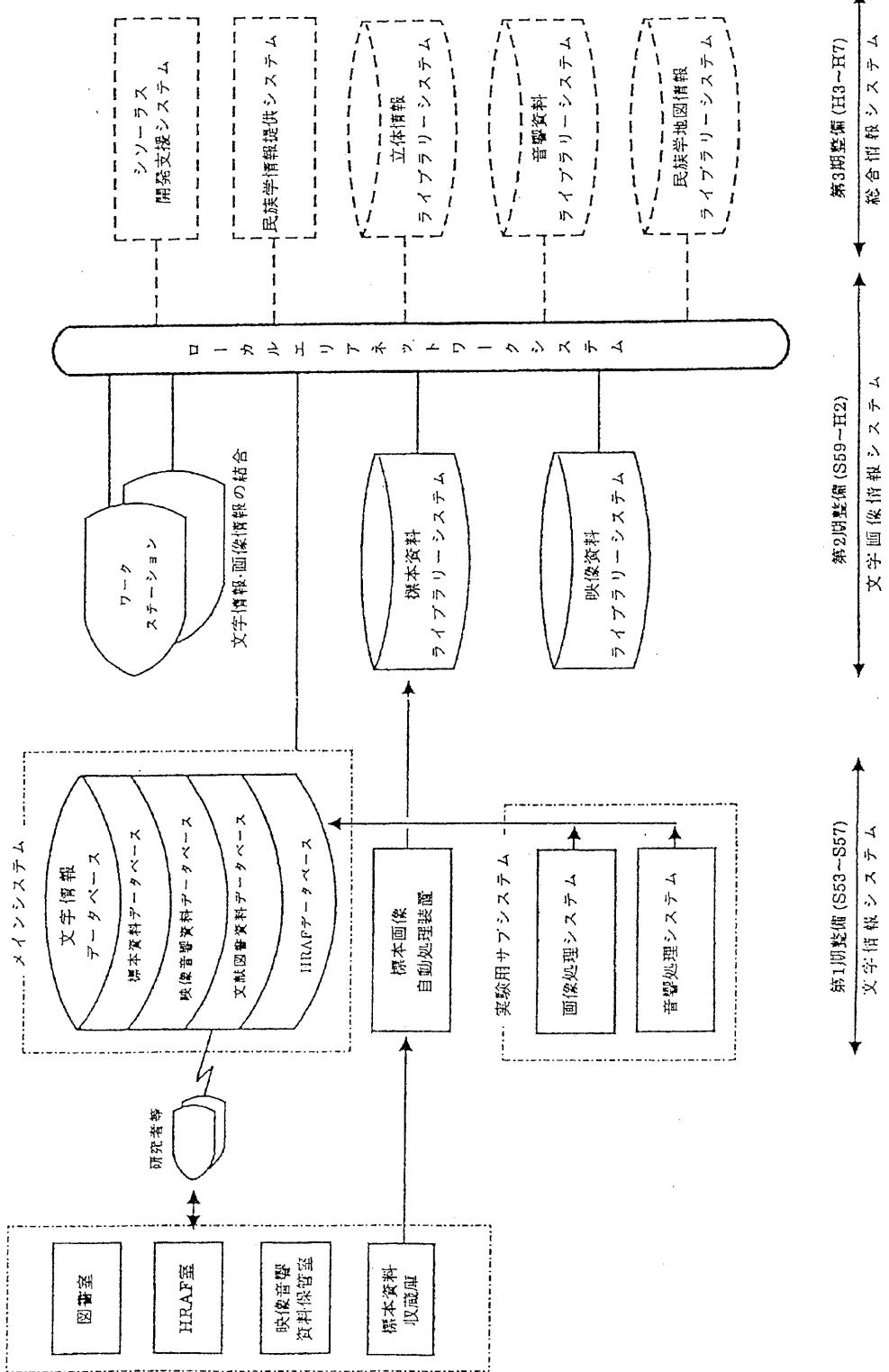
R A F 資料（Human Relations Area Files = 人間関係地域ファイル）、映像音響資料、標本資料などの研究資料について、文字情報の処理、蓄積、検索をうけもつメインシステムと画像や音響情報を研究の目的に応じて処理するためのサブシステムとの整備。

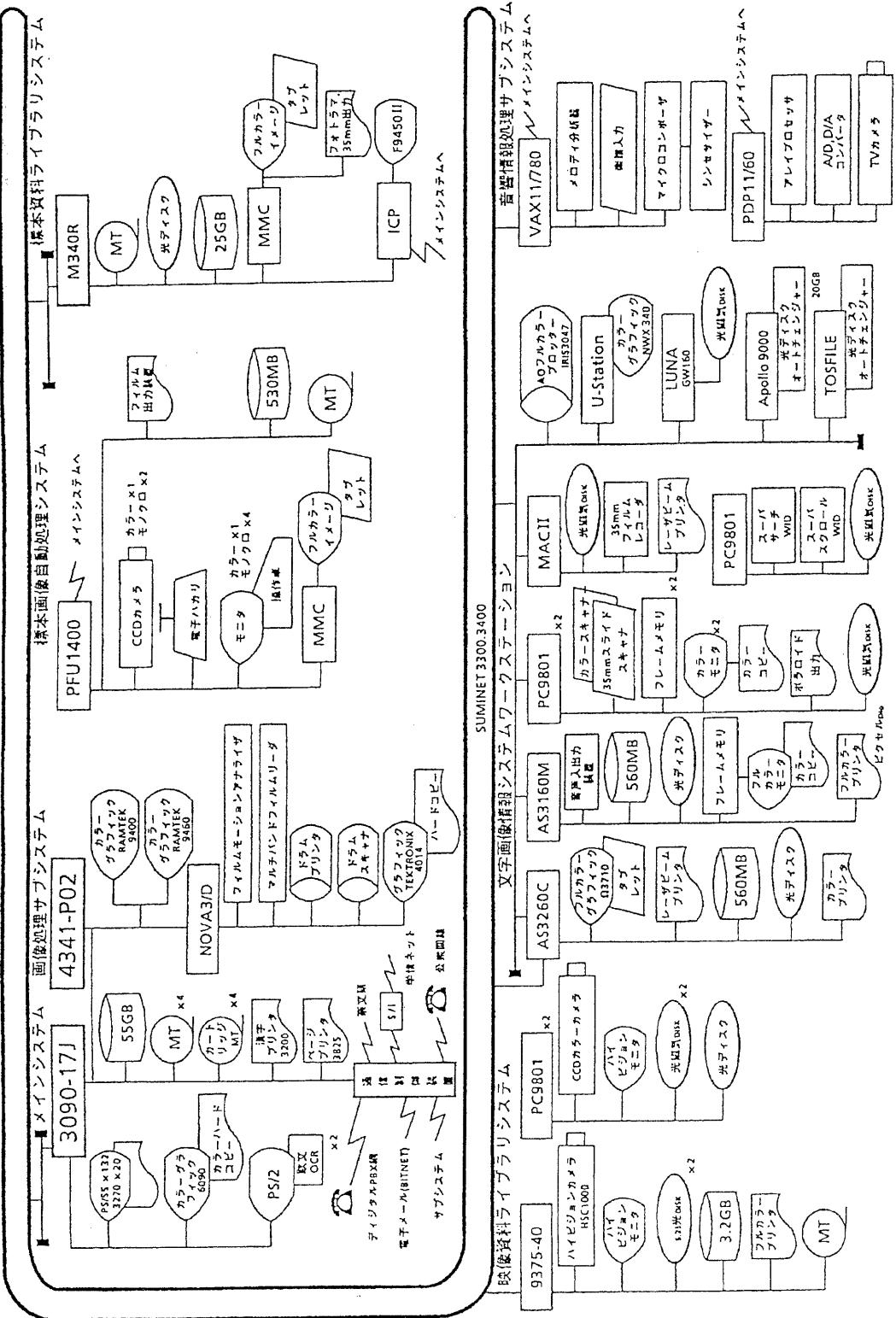
第二期整備計画（1974～1990） 画像を含めた文字画像情報システムとマルチメディアデータベースの構築が整備の中心であった。研究資料の画像情報をデータベース化することを主眼として、画像情報の形態に応じて蓄積されたライブラリーと文字情報を蓄積したメインシステムとをローカルエリアネットワーク（LAN）で結び、高機能なワークステーションから様々な情報を統合的に活用できるよう、分散型のマルチメディアデータベースの構築をおこなった。この第二期整備計画終了時までに計画され、現在も作成が続けられている国立民族学博物館データベース（COMET = Computer data for the national Museum of Ethnology データベース）に収録されているデータベース件数とそれに対応する資料数とを「所蔵資料とCOMETデータベース件数」に示した。

第三期整備計画（1991～1995） マルチメディアデータベースの構築と、LANにより、それらの分散したデータベースを統合的に利用することができるようなシステムの整備が中心となる。

このように、平成7年度に第三期整備計画が終了することが予定されている。その時点での夢にどの程度合致したものが、できているかどうか疑問である。しかし、ハードウェア、ソフトウェアは日進月歩の状態で技術進歩をしている現状から考

情報処理システム整備計画概念図





所蔵資料と COMET データベース件数

平成 3 年 10 月 1 日現在

資料名	資料種類・点数(冊)	情報の種類	データベース件数(件)	データベース化率(%)
文献叢書資料	単行本 日本語 外國語 計	102,986 冊 179,518 232,504	単行本・書誌情報(日本語) 単行本・書誌情報(日本語)	97,500 156,677 256,177
雑誌	日本語雑誌 日本外國語雑誌 計	21,348 冊 36,041 57,389	雑誌・書誌收藏情報 小冊子類・書誌情報	9,223 28,312
小冊子資料	日本語雑誌 外國語雑誌 計	4,993 種 4,325 9,318	JP-MARC データ(1977 ~1991.8.21) US-MARC データ(1969 ~1991.6.17)	99.0 2,774,808
マイクロ写真資料		28,312 点 1,898 種		100.0 100.0
HRAF 資料	文部情報スリップ テキスト(原典)スリップ	6,237 ソース 789,815 枚	民族誌文献書誌情報 主題コード情報	6,237 798,815
映像音響資料	レコード CD テープ(言語) テープ(音楽) フィルム(16ミリ) ビデオテープ 計	34,632 点 6,107 2,996 2,780 1,858 48,373	管理情報 学術研究情報(日本語) 学術研究情報(外國語) スライド画像情報	44,213 43,604 89,226 20,000
標本資料	海外資料 国内資料 計	103,567 点 82,699 186,266	管理情報 学術研究情報 標本資料画像情報	180,690 115,351 54,330
国内資料調査報告集	国内資料調査報告集 1~11集	12,005 点	国内資料調査報告集 1~11集	12,063 100.0

(注) COMET は、COMputer data for the National Museum of Ethnology の略である。

えると、梅棹館長の描いたホロティークの夢が具体的なものとして形をあらわしているのではないかと期待している。

民族学博物館情報処理システムの 今後の課題

国立民族学博物館は、年次計画的にハードウェア、システム、蓄積されるデータの整備をおこない、博情館として必要な条件を着々と整えている。

梅棹館長は、「博物館はもともと、総合情報館である。……観客に、総合的情報を提供するためには、その用意がいるのである。」と、別の機会にのべている。^{*3} 国立民族学博物館は、総合情報を提供するための用意が整いつつある。しかし、問題は誰に情報を提供するかである。現時点では、ビデオテークやフォノマークの一部は、一般の観客に提供されている。しかし、他の情報やシステムは開放されていない。観客に、総合情報を提供しない、あるいは提供できないのであれば、総合情報館としての博物館の存在意義はなくなってくる。

現在のシステムでは、一般観客に情報を提供することができないのであれば、第三期整備計画によって実現するシステムでどこまで可能になるかが、国立民族学博物館が博情館としての位置づけを確保できるかどうかのわかれめになる。さしあたっては、第三期整備計画に予定されている「民族学情報提供システム」が、どこからでも、いつでも、誰でもが、簡単に利用できるようなシステムとして、広く一般に提供されることが必要である。

博情館であるためには、ものをみせるためのさまざまの工夫と同様に、あるいはそれ以上の努力、工夫やそのための準

備をして、情報を利用してもらえるようになるのが、また、それをどのようにして実現していくかが今後の国立民族学博物館の大きな課題になるであろう。

おわりに

本稿においては、博物館から博情館へと脱皮するための、パイオニア的な仕事をしている国立民族学博物館の、情報に関する基本的な考え方、現状、今後の構想について報告した。ここでの試みが、すぐに他の博物館にも普及できるかというと問題点が多くあり、不可能に近いのではないかとすら思える。国立民族学博物館は日本でというよりは、世界で一番恵まれた環境にあり、国立民族学博物館だからできたという面が少なくない。

問題点は、予算、担当する要員の確保といったことだけではない。それらは、時を得れば実現する可能性はある。もっと大きな問題は、博物館に関連している人たちの意識改革である。また、実現するために乗り越えていかなければならぬ、多くの障害を突破できるだけのエネルギーであり、そのためのリーダーの確保である。

民族学博物館の例でいえば、強烈な個性と信念をもち計画を推進させ、実効を示すことによって館員の意識を変えていったリーダー、梅棹忠夫がいなければ実現できなかっただろう。同じような条件に恵まれながら、実現できなかっただ他の博物館の例をみると、その感を深くする。

*1 『月刊みんぱく』 1985年1月号

*2 「岩波講座 転換期における人間」第十巻 1989

*3 「蔵一暮しを守る」 1980 文芸春秋